

【原著】

カリキュラムマネジメントの方法と実践

——広島文教女子大学における取組を通して——

橋 村 勝 明

Curriculum Management Methodology and Implementation

——Developments at Hiroshima Bunkyo Women's University——

Katsuaki Hashimura

I カリキュラムマネジメントの必要性

現在様々な場で、大学教育の「質保証」とその上での「質的転換」が話題となっている。「質的転換」は、誤解を恐れずにいえばアクティブ・ラーニングや学修時間の確保など従来の教育方法の転換と受け止められる。一方、「質保証」は「学士力」を担保するということであると理解できるが、これら「質保証」と「質的転換」とは先にも示したように別々に論じられるものではない。

勿論、下記引用にあるように、学修時間を確保することによって質を保証するという側面はあるが、裏を返せば単に時間を確保すれば良いということでもなく、個々の大学が目標とする人材を育成しているかどうか、という部分が問われなければならない。このことについては、平成24年8月に公表された中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)に以下のように指摘がある。

学士課程教育における質を伴った学修時間の確保は、世界的にも学士課程教育の質の保証が課題になる中で、国際的な信頼の指標として不可欠である。(13頁)

そこで、学修時間による質的保証をしてゆく一方で、教育内容についても検討してゆかなければならない。そのことについて、同答申では以下のように記載されている。

教育課程の体系化

大学、学部、学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を修得させようとしているか、そのために個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかが、あらかじめ明示されること。なお、大学としての学位授与の方針に対して授業科目数が過多であったり、科目の内容が過度に重なっている場合はその精選の上に体系化が行われる必要がある。また、科目を履修する学生をはじめ、当該大学、学部、学科等が提供している教育課程の内容に関心を持つ全ての人に教育課程の体系が容易に理解できるように、科目間の関連や科目内容の難易を表現する番号をつける(ナンバリング)な

ど、教育課程の構造を分かりやすく明示する工夫が必要である。

(中略)

全学的な教学マネジメントの確立

教員の教育力の向上を含む諸課題の発見と解決を進めるため、学長のリーダーシップの下、全学的な教学マネジメントを確立し、大学教育の改革サイクルを展開させること。(15頁)

具体的な作業としては、下線部を実施してゆくことであるがその作業を行ってゆくためには様々な目標に照らして科目が配置されているかを検証しなければならない。そこで、上記答申を受けてカリキュラムマネジメントの必要性を感じⁱ、広島文教女子大学においてその取組を始めることとした。以下はその報告であるⁱⁱ。

Ⅱ 教育目標とカリキュラムマネジメント

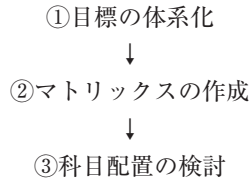
まず、本学には教育理念をはじめとして様々なレベルの目標が掲げられている。そして、あらゆるレベルの目標が大学の統一的な人材育成目標である以上、目標の全体が統一的な体系、内容を有していなければならない。従って、現在人材育成目標が掲げられているが、それは上位目標の範囲内で設定されている筈である。

さて、目標と科目配置との関係性についてであるが、その優先順位は目標にあることはいくまでもない。そこで、目標を具現化するためには、目標の具体化を繰り返すことによって個別の下位目標を設定し、それに見合う科目を配置するという方法が妥当であろう。目標に添った科目配置をすれば、そもそも目標が体系的であるのでそれに従った科目配置が体系的であることは必然となる。そして、個々の科目については個別の目標に科目の内容が相当しているか否かを検証してゆけばよい、ということになる。それら、一連の方法としては以下のような手順が考えられる。

まず、本学の場合学園訓には「責任感の強い逞しい実践力のある人にならなう。」とある。「責任感の強い」ということは、例えば初等教育学科に於いてはどのような必要性がそこにあるのか、ということ具体的に検討しなければならない。当然教育現場の職員には責任感が求められる。責任感とは何かと問われれば、具体的には子どもの成長を保証するという責任感であったり、成績管理に関わる守秘義務に対する責任であったりする。それらの能力は初等教育学科の4年間の学士課程のどの部分で修得することが出来るのか、ということが明示されなければならないということである。

抽象的な目標がお題目のように掲げられており、各科目の運用は別といった発想は、目標に基づくカリキュラムマネジメントを実践してゆく上では、切り捨てなければならない。目標として掲げている以上は、学士課程の中で確実に修得されなければならないし、又そのようなカリキュラムが用意されなければならない。

まずは、各学科において目標を具体化し、その目標を達成するためには具体的な表現に基づく個別の下位目標を設定しなければならない。その際に、目標の段階を2乃至3段階設定し、各学科の目標そのものが体系化されるようにする。個別の目標が設定されれば、それと授業科目とを組み合わせるマトリックスを作成する。そして記号の配置を確認し、内容について修正が必要な場合はシラバスを再検討する、科目そのものが不要でない場合は削除するなどという方向での検討が必要である。以下、方法の大枠を示すと以下ようになる。



このような段階性をもって、カリキュラムマネジメントに取り組むこととした。

Ⅲ 目標の体系化

本学には、教育理念以下様々なレベルの目標が設定され、それらは体系性をもって構成されている。各目標を以下に記す。

教育理念

心を育て 人を育てる

学園訓

- 一、真理を究め正義に生き勤労を愛する人にならなう。
- 一、責任感の強い逞しい実践力のある人にならなう。
- 一、謙虚で優雅な人にならなう。

学園ビジョン

- 一、われわれは、自らの心を育て人の心に働きかける力を身につけた人材を育成します。
- 一、われわれは、豊かな知性とたくましい行動力で未来を切り拓く人材を育成します。
- 一、われわれは、共に支えあい高めあう社会の実現を目指します。

大学ミッション

- 一、広島文教女子大学は、謙虚で優雅な人間性を育むとともに、やさしくあたたかい心で他者を思いやることのできる人を育成します。
- 一、広島文教女子大学は、正しい判断力とたくましい実践力を身につけた人を育成します。
- 一、広島文教女子大学は、地域とともに成長しつづける大学を目指します。

学科人材育成目標

〔初等教育学科〕

教育に関する専門的な知識や技能を修得し、主体性と協同性を持った逞しい実践力のある人材の養成。

〔人間福祉学科〕

誰もが安心して生き生きと暮らすことができる、福祉社会を支える知識技能を持った心豊かな人材の養成。

〔心理学科〕

心身の健康に関する専門的な知識や技能を身につけた、リーダーとして地域に貢献できる人材の養成。

〔人間栄養学科〕

人の健康及び食に関する専門的な知識や技術と豊かな人間性を身につけた人材の養成。

〔グローバルコミュニケーション学科〕

実践的な英語力を身につけ、グローバルな視野で幅広いものの見方・考え方ができる自立した人材の養成。

〔大学院〕

人間の教育・健康及び社会福祉の分野において、高度な専門的知識と研究能力、優れた実践力を身につけることによって、地域社会の中で中心となって活躍できる人材の養成。

上記のように、本学の目標は各段階毎に詳細に設定されており、それらは互いに関係性を持ちながら記述されている。しかし、学科の人材育成目標とその上位目標との関係性を直ちに理解しようとするとは多少複雑になるので、「学園訓」から「大学ミッション」までの目標を、5つの目標分野に分け、その中に学科人材育成目標を位置付けることとする。

学園訓から大学ミッションまでの各目標を纏めると、以下のように分類整理が出来る。以下、学園訓を「訓」、学園ビジョンを「ビ」、大学ミッションを「大」とする。

学究目標

「真理を究め」(訓)、「豊かな知性」(ビ)に基づく「正しい判断力」(大)を持つこと。

態度目標

「正義に生き」(訓)、「勤労を愛」し(訓)、「責任感」を持った(訓)、「謙虚で優雅な人間性を育む」(ビ・大) こと

実践目標

「逞しい実践力」を持つこと (訓・ビ・大)

育心目標

「自らの心を育て」(ビ)、「人の心に働きかける力」(ビ)を持ち、「やさしくあたたかい心で他者を思いやる」(大) こと

包括目標

「未来を切り拓く」(ビ) 力を持つこと

これらの目標から更に学科人材育成目標へとブレイクダウンする為には、上位目標を各学科の特性に合わせて解釈するということが必要である。

例えば、学究目標については以下のように、問いを設定しつつ進めてゆく。

○○学科における、「真理を究める」とは何か。また、なぜ必要であるのか。

説明①→学科二次目標①

説明②→学科二次目標②

○○学科における、「豊かな知性」とは何か。また、なぜ必要であるのか。

説明①→学科二次目標①

説明②→学科二次目標②

○○学科における、「正しい判断力」とは何か。また、なぜ必要であるのか。

説明①→学科二次目標①

説明②→学科二次目標②

これらの質問に一つ一つ丁寧に答えて行くことが必要である。そして、各学科目標を細分化し、五つの分野に再構成して上記の質問に対する回答をあてはめてゆく。もし五分野全てが埋まらなければ、上位目標をそのままあてはめる。

〇〇学科

目標分野	学科目標	学科二次目標
学究目標	学科目標①	学科二次目標①
		学科二次目標②
		学科二次目標③
態度目標		学科二次目標①
		学科二次目標②
実践目標	学科目標②	学科二次目標①
		学科二次目標②

(以下略)

目標の設定を確実にブレイクダウンしてゆくためには、学科長のリーダーシップとカリキュラムマネジメントに対する理解が欠かせない。そのために、マネジメントを実践する教員と各学科長とが直接面談するなどして目標の設定を行ってゆくこととした。

以下にその結果としての二次目標の一部（例として初等教育学科のもの）を掲げる。

表1 初等教育学科における学究目標の体系

目標5領域	目 標	学科目標	学 科 二 次 目 標
学究目標	「真理を究め」(訓), 「豊かな知性」(ビ) に基づく 「正しい判断力」(大) を持つこと。	教育に関する専門的な知識や技能の習得	教育の理念についての基礎理論・知識を理解できる。
			教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識を理解できる。
			教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を理解できる。
			教育学における基本的知識を体系的に、教育現場と関連づけて理解できる。
			子ども理解のために必要な心理・発達論の基礎知識を理解できる。
			人々が豊かに生きていくための学習支援、教育福祉などに関する基礎的知識を理解できる。
			子どもの特性や状況に応じた対応の方法を習得できる。
			特定の教育課題について、文献やデータを収集して、吟味できる。
			教育に関する幅広い教養を身につけ、読み・考え・表現できる。
			情報処理能力やピアノ・絵画・スポーツ・調理等の指導ができる実践的技能を習得できる。

上には例として初等教育学科の学究目標の部分のみを掲げたが、実際には他の4領域についても作成している。また、同じ作業をすべての学科で実施した。

Ⅳ マトリックスを活用した目標設定マニュアル

学科目標を実現するための学科二次目標が設定された状況の中、次に取り組むべきは二次目標を受けて具体的にどの科目の中で二次目標を実現してゆくのか、ということを明らかにすることである。この作業を行うことによって、同時に以下の事柄が達成される筈である。

- ①科目の目標が明確になり、カリキュラムとしての体系性を構築できる。
→体系性の構築
- ②余剰科目、不足科目が明らかとなり、整理ができる。
→科目配置の妥当性
- ③専門科目内で達成できる目標であるか否かが明確になる。
→目標の確認
- ④科目担当者が担当科目で達成しなければならない目標を意識することができる。
→目標の共有化

これらの事柄を達成するために、以下の手順に従ってマトリックスを作成することとした。

[手順1]

学科長は、学科専門科目の入ったファイルを学科専任教員に配信する。

[手順2]

教員に対して、自身が担当する科目にのみ以下の記号を入力するよう指示をする。

- ◎ 学科二次目標を達成するための中心的な科目である。
- 学科二次目標を達成するための科目である。
- △ 学科二次目標に関わる科目である。
- 無印 学科二次目標には関わらない科目である。

[手順3]

学科長は入力されたマトリックスを集約し、一枚のマトリックスを作成する。作成したものを途中経過として、提出する。

[手順4]

学科会で目標を共有化し、学科長を中心とするカリキュラム担当者で目標の再設定（記号の付け替え）を行う。

[手順5]

学科会で再度目標を共有化し、ファイルを提出する。

以上の手順に従って科目体系のマトリックスを作成することとした。なお、作成に際しては科目担当者の十分な理解に基づいて実施してゆくことが望ましいと考えるので、学科長にはその点を配慮して頂き説明を依頼することとした。その結果として学科より提示されたマトリックスが以下のものである。例として初等教育学科の一部分を掲げる。

表2の内、a～jの記号は、後に触れるナンバリングの基礎となる記号である。これらの記号の配置を分析し、内容の整理や目標の設定などの整合性を図ってゆく必要がある。この表をどのように分析するのか、ということについては次に説明をする。

表2 初等教育学科における学科二次目標と科目のマトリックス

学科二次目標		教師論	教育原理	教育方法学	教育史	心理学概論	教育心理学
教育の理念についての基礎理論・知識を理解できる。	a	◎	◎				
教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識を理解できる。	b				◎		
教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を理解できる。	c				◎		
教育学における基本的知識を体系的に、教育現場と関連づけて理解できる。	d		◎	◎			
子ども理解のために必要な心理・発達論的基礎知識を理解できる。	e					◎	◎
人々が豊かに生きていくための学習支援、教育福祉などに関する基礎的知識を理解できる。	f						◎
子どもの特性や状況に応じた対応の方法を習得できる。	g						
特定の教育課題について、文献やデータを収集して、吟味できる。	h						
教育に関する幅広い教養を身につけ、読み・考え・表現できる。	i						
情報処理能力やピアノ・絵画・スポーツ・調理等の指導ができる実践的技能を習得できる。	j						

V マトリックスの分析方法

マトリックスが完成をした後は、カリキュラムマネジメントを実践する教員及び学科長を中心とするカリキュラム担当者でマトリックスを読み取る作業をしなければならない。その読み取り方について、大凡の方向性を示し共通理解を得た。その際に、マトリックス作成の意義について再度確認をし、その観点からの読み取り方を示した。なお、④に関してはマトリックス作成段階で目的が達成されている筈であるので省略する。

- ①科目の目標が明確になり、カリキュラムとしての体系性を構築できる。
→体系性の構築
- ②余剰科目、不足科目が明らかとなり、整理ができる。
→科目配置の妥当性
- ③専門科目内で達成できる目標であるか否かが明確になる。
→目標の確認
- ④科目担当者が担当科目で達成しなければならない目標を意識することができる。
→目標の共有化

表の読み取り方については、以下の表の読み取り例に則して説明をする。

①体系性の構築

- ・同一目標に◎が複数記されている科目は関連性が強いことを示す（科目3と科目5）。

	科目 1	科目 2	科目 3	科目 4	科目 5
目標 1			△		
目標 2					◎
目標 3	△	△	◎		◎
目標 4		○		○	○
目標 5					

- ・同一目標に◎と○、或いは○と△が記入されている場合は緩やかな関連性が認められることを示す（科目 1 と科目 3）。
- ・◎が多い科目は、学科専門科目の内基幹科目であることを示す（科目 5）。

②科目配置の妥当性

- ・関連性の認められる科目間について、長期に亘って達成する目標であれば開講期をずらし、短期で達成できる目標であれば開講期を揃えることを検討する（科目 3 と科目 5）。

③目標の確認

- ・科目に◎○が無い場合は、余剰科目であることを示す（科目 1）。
- ・目標に△または記入無しの場合は、目標そのものを見直すべきであること、または専門科目外で達成すべき目標であることを示す（目標 5）。

本年度は、カリキュラムマネジメントの第一サイクルにあるので、シラバスにはマトリックス上の目標に関わる記載は無いかもしれない。しかし、この度のマトリックス作成によって科目が担うべき目標を明確にし、個々の授業ではなく学科専門科目という課程を通して学科目標を達成するというシステムと、共通意識とが形成されればカリキュラムマネジメントの一定の目的は達成したと考えて良い。

一方で教員個々の教育能力・資質の問題については、FD の改善や教授資格の設定など、別に検討してゆく必要があろうと考える。

カリキュラムマネジメントは、PDCA サイクルの中で実施してゆかなければならないことは周知のとおりである。これまでは PD について説明をしてきた。CA についてはⅧにおいて説明することとし、その前に目標体系に則したナンバリングの試案について述べたい。

Ⅵ 目標体系に則したナンバリング

科目の体系化については、マトリックス表によって示された。次に、科目の関係性に配慮をした上で、その段階性について検討を進めてゆかなければならない。そこで、各科目を記号化しナンバリングをしてゆくことによって段階性について明確にしてゆきたい。

目標の体系は、学科目標までが 5 領域で、学科二次目標が複数となっている。各科目の◎の位置を記号で表そうとすると、5 領域をローマ数字Ⅰ～Ⅴで表し、学科二次目標を a～z で表すと、例えば教師論は Ia, IIac となる。

目標 5 領域
学究目標→Ⅰ

学科二次目標
教育の理念についての… → a
教育に関する歴史・思想…→ b

態度目標→Ⅱ 研究と修養に努め… → a
 人権尊重の考えを理解し…→ b
 (以下略)

それらを繋ぎ、Ia IIac とすれば科目がどのような目標を担っているのかわかる。更に、段階制を表示するためには現行のセメスターを記号化すれば良く、教師論の場合には1セメスターであるので1を記号として加え、Ia IIac1 とすれば科目の目標と段階性の両方を記号によって表示することが出来る。例えば、現行で複数セメスターにまたがっているものは、12などと表示することが出来る。

記号化したものを並び替えれば、科目間の関連性の強さについて明らかとなる。目標に照らした段階性を提示することによって、科目における達成の度合いについて各授業担当者が理解することが出来るのではないか。

ナンバリングの作業は、結局のところ科目間の整合性、段階性を確認することに目的があり、目標に対して科目配置に過不足がないか、ということを検討することにある。そのような考えに立てば、機械的なナンバリングの後に行われる各学科に於ける分析が重要になってこよう。セメスターをナンバリングに盛り込む意義については、目標の段階性を示すことが挙げられる。仮に目標の内容が同じ、或は類似する科目が他にあっても、セメスターが異なっていれば、そこには目標の段階性があると考えらるわけである。一つの科目が受け持つ目標は、他の科目から完全に独立しているということではなく、他の科目と互いに重なる部分を持ちながら体系性を持っているのだと考える。そのような意味から、科目AではIa IIac1 という記号であらわされる一方で別の科目BではIa IIa2 という科目があってもよい。但し、そこには到達目標の違いがみられるはずである。この取組では、単にセメスターにおける段階性ということを取り上げたが、学科二次目標が複数設定されている中で、それらが等価であるということではなく、二次目標間でも段階性があろう。ヨーロッパのボローニャ・プロセスでは、コンピテンスの重要性という観点から序列を設けているⁱⁱⁱ。今後はそのような重要性の観点について検討も必要であり、そうすることでより体系的なカリキュラムを構築することが可能となろう。

Ⅶ カリキュラムマネジメントのCA段階について

ここまで、カリキュラムマネジメントを実施する方法として、教育目標をどのようにして達成するのかということを中心として検討を重ねてきた(P)。その方法として、目標を細分化し各科目へと落とし込むことによって達成することとした。目標を科目へと落とし込む際にはマトリックスを作成することによって、課程としての体系性と科目担当者の共通認識との確立を同時に達成することとした(D)。

そして、今後に残された課題は、これらの取組をいかに評価するのかということである(C)。さらに評価に基づく改善方法についても検討をしておく必要がある(A)。そこで、これらCA段階について現時点(PD段階)での見通しを述べたい。

カリキュラムマネジメントを実施する際には先に記したように、評価と改善とをしてゆくこととなる。現在取り組んでいるカリキュラムマネジメントは、教育目標を達成するためのものである。評価の指標としては目標が達成されたか否かで評価しなければならない。学修成果を評価する方法としては、直接評価と間接評価とがある^{iv}。

直接評価	試験, レポート, 研究発表, 卒業論文 など
間接評価	学生調査, ポートフォリオ など

これら二種の評価方法を組み合わせることによって、より妥当性のある評価結果がえられると考える。現在のところ、直接評価については検討の余地もあるが科目の成績や各学年に於ける GPA によって知ることが出来る。一方で間接評価については、今後全く新たに取り組んでゆかなければならない。そこで、間接評価の方法について、以下に提案をしたい。

教育目標を達成するために二次目標を設定した。その二次目標は学生視点の到達目標で表現されている。これは、二次目標をそのまま間接評価に用いるためである。学科二次目標について、各学年の終わりに学生に対して5段階のアンケート調査を行う。その結果をデータ化し、学科の目標設定と学生の意識との整合性の検証をするということである。

本調査の対象としては、毎年学年末に全学生を対象として実施しなければならない。その結果を蓄積し目標の再設定、カリキュラムの再構築に向けて検討を進めてゆくのである。

一方で、直接評価の結果とも照合してゆかなければならない。つまり、学生の意識と客観的な結果とにずれが生じていることも含んで検討をするべきである。直接評価については、科目に学科二次目標が落とし込まれているので、間接評価で目標が達成されていないと判断された項目については、直接評価の成績を確認しなければならない。その検証の過程が評価 (C) となり、評価に基づく改善 (A) へと繋がってゆくのである^v。

以上、現時点での CA 段階についての見通しを記した。カリキュラムマネジメントそのものは試行段階にあるので、細部については今後の状況をみてより有効と考えられる方法を検討してゆきたい。

VIII まとめと今後の課題

以上、目標に基づくカリキュラムマネジメントの実践について、経過報告を兼ねて文章化した。目標を如何にして具現化してゆくのかということが、今後大学の独自性を示してゆく上で重要な課題となってくるであろう。特に、私立大学の場合は建学の精神があり、それに基づく教育が実践されているはずである。教育の質とは、一定の評価基準で測ることの出来る指標と、独自性に基づく指標とが存在している。独自性に基づく指標こそが、今後大学の評価を大きく左右するものとなるであろう。それだけに、教育の質保証という観点からは、大学の教育課程によらない専門教育の汎用性を保証する一方で、独自目標に照らした教育の保証がなされているか否かということ、私立大学の存在意義を問うことになるのではないかと考えるのである。

今回の取組によって、様々な教育目標がどの程度達成されたのか、ということについては改めて検証をする必要があり、そのことについては今後の課題としたい。

- i カリキュラムマネジメントの意義については、中留武昭『大学のカリキュラムマネジメント—理論と実践—』(東信堂, 2012年8月20日)に詳しい。
- ii 広島文教女子大学は、広島市安佐北区に所在する一学部五学科からなる大学である。筆者は学内においては教務及び学生指導を司る立場にあるが、高等教育に関しては専門外であり、文章中誤解に基づく記述が含まれる恐れがある。その場合にはご寛恕願いたい。

カリキュラムマネジメントの方法と実践

- iii フリア・ゴンザレス, ローベルト・ワーヘナール編著, 深堀聰子・竹中亨訳『欧州教育制度のチューニング ボローニャ・プロセスへの大学の貢献』(明石書店, 2012年2月20日)
- iv 学習評価については, 東北大学高等教育開発推進センター編『教育・学習過程の検証と大学教育改革』(東北大学出版会, 2011年3月30日)の第一章「学習成果測定方法の考察—JCIRPの開発意図と期待される役割—」(山田礼子執筆担当)を参照した。
- v 本学の学習評価の方法については, なお検討の余地があることは言うまでもない。一部の事例報告ではあるが, 米国オハイオ州のケント州立大学では, Faculty Development Center がワークショップなどを開催することによって教員のサポートをしているということである。今後このような事例などを踏まえて検討してゆきたい。なお, この事例報告は本学教員である Mathew Porter 氏の調査によるものであることを付け加える。

—平成25年10月15日 受理—